

但馬牛血統発祥の地



和牛のふるさと小代

Natural & Soulful

T A J I M A U S H I



小代観光協会

和牛の ひらと 小代

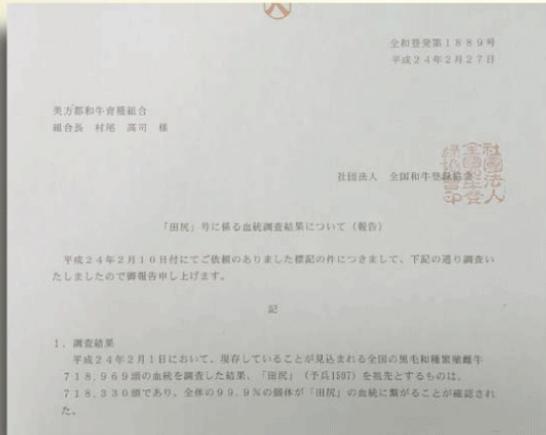
驚くべき血統の数字

平成24年2月、社団法人全国和牛登録協会の調べで、但馬牛について驚くべき数字が明らかになりました！

99.9%

これは、全国の黒毛和牛の繁殖メス牛
(子牛を生産するために飼育されている
メス牛)718,969頭のうち、718,330頭の
メス牛が「田尻号」という一頭の但馬牛の
種オス牛の子孫であると証明された
割合です。

お母さん牛の99.9%が田尻号の子孫
ですから、そのお母さん牛から生まれた
牛ももちろん田尻号の子孫、つまり、
日本のほとんどの黒毛和牛が田尻号の
子孫というわけです。



全国和牛登録協会発行 血統調査報告書

牛を愛する人々の力

但馬牛は、もともと田畠を耕すために飼われていて、小柄で小回りのきく但馬牛は、とてもよく
働きました。そして、田植えの時期が終わると、エサの草刈りや牛舎の掃除で管理が大変なため、
昼間は集落から離れた山の上の放牧場で飼われていました。 村岡区では標高900m、小代では、
集落から4km、標高差500mにもなるところへ放牧されていましたことが分かっています。

但馬は、「弁当忘れても傘忘れるな」という言葉があるほど日本の中でも雨が多く、昼夜の寒暖差
が大きいところ。 山々は豊富な水に恵まれ、野草や薬草も豊富にありました。 この美方郡の
植生は、屋久島や小笠原諸島にも並ぶ豊かな植生であることが分かっています。

但馬牛は、夏の間その柔らかくて栄養豊富な野草や薬草を食べ、毎日険しい山を往き来することで、足腰の強い、健康で丈夫な牛になりました。また、雪の多くなる冬には、「まや」と呼ばれる牛の寝床で飼われ、栄養が少なく硬い稻わらや干草を与えられていたので、辛抱強く粗食にも耐えられる牛になつたのです。

また、そうして鍛えられたしなやかな筋肉の間に、冬の間、寒さから身を守るための細かい脂肪が入り込み、これが今で言う『肉にサシ(霜降り)が入る』という状態を作り出し、毎日のように丁寧にマッサージしていたために、皮膚や毛が柔らかくなり、肉質も柔らかくなつたと考えられています。

但馬の人々は、大事な働き手で、子牛を産んで生活を支えてくれる牛を家族の一員として、同じ屋根の下の一番日当たりの良い場所を牛の寝床にし、愛情深く育てていました。小代の人たちは、硬い稻わらや干草を、囲炉裏の鍋で何時間も煮て柔らかくしたり、家族のご飯を牛のために茶碗一杯分残して食べさせたりもしていました。



写真提供：増田畜産

但馬牛は、長い年月、豊かな自然環境の中、何代にもわたって良質な草を食べ続けたおかげで、肉質は柔らかくて良質なものとなり、毎日の運動で鍛えられた体は健康で美しく、家族の一員として愛情たっぷりに育てられてきたために、あとなしくて飼い主の言うことをよくきき、よく働く牛になったのです。

今のように広い道路もなく、交通事情も良くなかった時代には、人だけでも峠を越えて往き来するのはとても大変でしたから、牛の交配は狭い谷の中だけで行われていました。

小代の牛は、そうした閉鎖された、しかも素晴らしい環境の中で、日本一の牛となるべく守られ続けていたのです。

これは、「閉鎖育種」といって、現在では他の地域との血統の差別化を保つために意図的に限られた範囲での交配がされていますが、昔はそんなことを考へることもなく、偶然にも優れた遺伝子が良い形で引き継がれています。

しかし、このことだけで素晴らしい但馬牛が誕生したわけではありません。

ここには牛を愛する人々の力もあったのです。

和牛の里と小代

但馬を代表する“小代牛”と前田周助

小代には、但馬牛の歴史を語る上で、無くてはならない人物が2人いるのを皆さんご存知ですか？

但馬には、良牛が育つ奇跡的ともいえる好条件が揃っていたわけですが、今のような確立された但馬牛改良の基礎は、今から200年も前、江戸時代に小代に暮らしていた「前田周助」という人が作り上げたものなのです。

この周助さんは、1897年の生まれで、猪ノ谷という戸数10戸ほどの小さな村に暮らしていました。小さな頃から大の牛好きで知られ、良い牛を見定める眼を持っていました。そして、かなり頭がよく知恵の働く人だったと言われています。

周助さんは、良い牛がいると、親のお金や財産を使うばかりか、親戚や姉の嫁ぎ先、さらには奥さんの実家にまで借金をして、その牛を買い求めました。

今、重要視されている「系統」の基礎にしようとした母牛には、現在の価値にして2,000万円もの大金を支払ったと言われています。

周助さんが、ここまでして良い牛を揃えたのは、自分のお金儲けのためではありませんでした。

小代の谷は、「蓑笠にも隠れる」とも言われた小さな小さな棚田や山畑が多く、農家の暮らしは決して楽ではありませんでした。

周助さんは、この小代の谷の人人が少しでも楽に暮らすには、どこよりも優れた牛を作り、高く売れるようになることが一番の方法だと考え、そのための仕組みづくりをしようと考えていたのです。

良い母牛からは良いメス子牛が生まれることに気づいていた周助さんは、小代のすべての村々を訪ね歩き、子牛の生まれた場所や日付、所有者、父牛、その特徴まで、小代のすべての牛について記録していました。時には村岡、養父まで牛を見に行き、良い母牛が見つかれば、大金を叩いて買い取り、中でも優れた牛は、小代の親戚や知人に預けたり、安くで売ったりして、小代の谷に残すようにしました。



前田周助顕彰碑（神水）

海外で、遺伝の法則が立証されたのは1900年。それまでに、日本の小さな村のお百姓さんが、近親繁殖なんということも知らずに血統整理をしていましたから驚きです。

小代には、そしてとうとう「但馬牛」とよばれる前の「小代牛」の基礎となる母牛に出会います。この牛が産む子牛は、みんな母牛に似た良い牛になり、またその牛も良い牛ばかりを産みました。他の地域から、これらの母牛を売って欲しいと切望されましたが、周助さんは、絶対にこれらの牛を小代から出さず、小代の中で「小代牛」の一大系統を作ることに成功したのです。

こうして周助さんの努力で増やされた小代の谷の子牛たちは、その後、高値でも飛ぶように売れて各地に広がり、「小代牛」は但馬の牛の代表となりました。

しかし、明治に入り、文明開化の波が訪れると、^{こがら}小柄な日本牛を^{こうはい}外国の牛のような体格の良い物に^{すいじょう}しようと、外国種のオス牛を輸入して交配に使うようになり、国や県でも推奨されたことから、但馬でもその交配が進んでいきました。

ところが、これが大失敗。^{きょう}生まれてきた子牛たちは、^{じゅだいいろりょう}気性は荒く大食らいなのに働きは悪く、^{なんざん}交配が進むにつれ、受胎不良や難産、病気が多発、肉質も低下し思うほど^{じゅんしゅ}の肉量も取れない牛になってしまいました。また、他の地域との交配も進み、良牛を生み出す血統、「純粹種が姿を消す」という危機を迎えます。



写真提供：上田畜産(美方高原牧場)

T A J I M A U S H I

和牛の歴史と小代

“蔓牛”の開発

周助さんが作った「小代牛」の一群は「周助蔓」と呼ばれていました。
ここでいう「蔓」とは、優れたメスの血統集団のことといいます。

その「周助蔓」の一部は、小代から出て他の地域の牛の改良に使われましたが、2代目3代目になると、その優れた形質は失われたといわれています。



外国種との交配が失敗に終わった但馬牛でしたが、終戦後、元の素晴らしい但馬牛を取り戻そうと、新しい血統の基礎作りが始まりました。

この時、この基礎の中心となつたのは、小代でも一番山深い、標高700mもある高地で飼われていた、周助蔓の牛たちでした。この場所は、他の村からも遠く離れ、行き来するにも道の整備が十分でなかったために、外国種との交配をまぬがれた純粋な小代牛が奇跡的に残っていました。

新しい但馬牛の血統は、その基礎となつた牛「あつ」と、その奇跡の牛たちが暮らしていた「熱田村」にちなんで「あつた蔓」と名付けられました。

現在、全国の黒毛和牛の99.9%がその子孫と判明した名牛「田尻号」は、この「あつた蔓」の中から生まれ、その蔓の特色を維持していくばかりか、全国の黒毛和牛の改良に大きく貢献しました。

小代の谷の牛たちは、閉鎖育種によって優良形質が強固になったと考えられていますが、近親度合いが高くなれば、優良形質も純粋に近くになりますが、それによる弊害が出ることもあるわけですから、育種学や遺伝学の知られていなかった時代から、その素晴らしい形質が最高の形で受け継がれた「田尻号」は、小代の閉鎖育種が生み出した「究極の牛」と言ってもよいのではなかろうか。

究極の牛“田尻号”

「田尻号」は、貴田の田尻松藏さん宅に昭和14年に生まれ、その年に美方郡畜産組合に買い上げられたあと、一時は兵庫県にも預託され、昭和29年まで使われました。「田尻号」は、他の種オス牛の倍の年月を病気もすることなく活躍したのです。



田尻号：(但馬牛ミニ博物館蔵)

この田尻号の優れた点は、遺伝力の強いこと。特に肉質に関する遺伝的能力は特段に優れたもので、世界に誇る和牛肉の原点は、この「田尻号にある」と言ってもよいでしょう。

この「田尻松蔵」さんも、周助さんと同じように小さい頃から大の牛好きで、良い牛を見定める眼を持っていました。そして、田尻号の母牛「ふく江」に出会います。松蔵さんもまた、資産家に多額の借金を頼んで、この「ふく江」を手に入れました。よほど素晴らしい母牛だったのでしょう。ふく江を大変可愛がり、毎日の運動やマッサージを欠かさず、良い草を食べさせるために、山を切り開いて草地まで作ってしまいました。

田尻号は、このふく江が生んだ4頭目の子牛でした。松蔵さんは、この子牛が良い種オス牛になると信じて疑わず、ふく江と同じように、毎日の運動と手入れを欠かしませんでした。

この、松蔵さんの牛を見る眼と日々の努力によって、田尻号は生まれて半年後には美方郡の種雄牛候補として認められ、現在の但馬牛の元祖となる第一歩を踏み出すことができたのです。

もし、「ふく江」が松蔵さんのもとにやって来ていなかつたら、そして松蔵さんが良い牛を見る眼に優れていなかつたらどうなっていたでしょう？

田尻号は群や県の目にとまることなく去勢されてお肉になり、但馬牛は今のような名声を得られなかつたかもしれません。



田尻松蔵さんと但馬牛：(但馬牛ミニ博物館蔵)

松蔵さんは、田尻号を生産した功績が認められ、昭和30年に黄綬褒章を受章しています。また、田尻号の功績を讃えて建てられた顕彰碑には、次のように書かれています。

「この名牛が生れたのは偶然ではない。自然的な要因と、人為的な条件が融合しなければ叶わなかつた」

ここ小代の地に優良牛を生産するのに適した自然環境と地理的環境が揃っていたこと、そして前田周助さんや田尻松蔵さんのように良い牛を見極める力を持ち、優良牛生産に力を注いだ人々が、この小代をはじめ美方郡に沢山いたからこそ、田尻号は「和牛の関係者なら知らない人はいない」とまで言われる立派な牛になることができたのです。

但馬牛の今は、その条件の一つでも欠けていたらあり得なかつたでしょう。

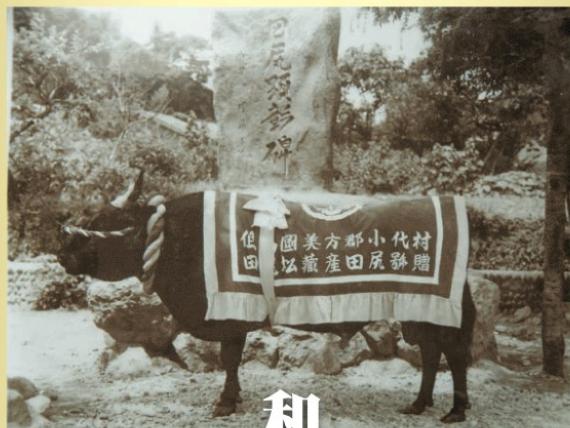
そして、そのスタートは小さな小さな村からの始まり。

そう、それがここ小代の地なのです。



田尻号顕彰碑：(神水)

但馬牛血統発祥の地



和牛のふるさと小代

Natural & Soulful

T A J I M A U S H I

【発行】

小代観光協会

平成 24 年 7 月 版

兵庫県美方郡香美町小代区神水 739-1 TEL 0796-97-2250 FAX 0796-97-2250 URL <http://www.ojirokanko.com>